

江口隆哉研究(Ⅲ)

—ドイツ留学をめぐる—

桑原和美

I 研究目的と手順

昭和6年12月、当時舞踊家としてはほとんど無名に等しかった江口隆哉は、宮操子とともに日本を発ち、新興国ドイツに向った。そして約2年後の昭和8年12月に帰国し、翌9年3月24日に第一回帰朝公演を開催して以来、戦前、戦後を通じて彼らの舞踊活動は日本の現代舞踊(モダンダンス)に多大な影響を及ぼしている。また、江口に関するこれまでの舞踊史的評価は、常にドイツのノイエタンツやマリー・ウィグマンとの関連においてなされてきた¹⁾。従って江口らのドイツ留学は、彼ら自身にとってのみならず、日本の舞踊史においても大いに検討すべき重要な意味をもつと言える。にもかかわらず、これまでその内容についてすらほとんど言及されてこなかった原因の一つは彼ら自身がドイツ留学に関する正確な記述を残さなかったことである。そしてさらに現在彼らの舞踊が映像の形で全く残されていないという資料面での制約がある。こうした制約は依然として残されているが、本研究では、江口の記述による「私の自叙伝」²⁾や、彼らに関する当時の新聞・雑誌掲載記事の再検討に加え、新たにウィグマン学校(ドレスデン)のカリキュラムを示す案内書、ベルリンのバッハザールにおける江口・宮の公演に対する批評等の資料を用いて、ドイツ留学の内容とその意義を明らかにしたいと考える。

考察の手順として、まず江口らがドイツから帰国する以前の日本において、ドイツの舞踊がどのような形で認識されていたかを簡単に述べたうえで、ドイツ留学中の生活や、特にウィグマン学校について採りあげ、さらにバッハザールでの公演と帰朝第一回公演に対する批評等から上記目的を検討する。

II 結果及び考察

ドイツで最初にマリー・ウィグマンの舞踊を観て日本に紹介したのは石井漢であるとされる。大正11年に渡欧し、約2年4ヶ月ヨーロッパを公演旅行した石井はベルリンで2回ウィグマンの舞踊を鑑賞し、その所感を日本の雑誌に寄稿した。³⁾

その後大正11年から昭和6年の間に、演劇関係では村山知義や林久男が自ら接したドイツのノイエタンツ(新しい舞踊)について感銘をもって詳

述し⁴⁾、また女性の中心的体育指導者、三浦ヒロ、高橋キャウ、藤村トヨ、伊沢エイらが続いて研修に出掛けた。さらに、新舞踊の藤蔭静枝、榎茂都陸平、児童舞踊の印牧季雄も直接ラバンやウィグマンに接するなど⁵⁾、洋舞のみならず様々な分野の人々が当時ヨーロッパで盛んに注目されていた新しい舞踊や体操に目を開き、さらには自ら学び、その活動に大きな影響を受けている。彼らを介して齎された知識や情報は日本国内でのドイツ・ノイエタンツの理解に大きな役割を果たしたと言える。またこの頃の出版物には、ラバン、ウィグマンらに関する記述や写真が散見される。

さらに洋舞界の状況として、石井漢に代表される「舞踊詩」が昭和に入って低迷し、大衆がそのような舞踊に物足りなさを感じ、「新しい舞踊」を求める気運が高まりつつあった。当時の新聞、雑誌上に掲載された舞踊公演の記事数の多いことは、一見舞踊の活況振りを示すものと見られたが、一方においては、そうした表面的な活況に目を奪われて満足すべきではなく、むしろその質的貧困に目を開き、改善の方途を見出すべきであるという発言が見られる。そこでは特に「舞踊的教養」の必要を強調し次のように述べている。「第一に、若いインテリ層の中から本格的に舞踊的教養を積んだ進歩的な才能が出づべきことである。これ等の才能は勿論外国の優秀な教師について科学的な教育を受けなければならない」⁶⁾。こうした要求の背景には前記のような活字や写真による知識や情報によって「新しい舞踊」への期待が高まっていたにもかかわらず、実際には国内にそれを具現しうる舞踊家が不在であったことが考えられる。そうした様々な状況が江口らのドイツ留学を決意させ、その内容を方向づけ、また意味づける重要な要因になったといえよう。

昭和6年12月に日本を発ち、約35日間の船旅の後ベルリンに到着した江口らは約1年間をここで過した。当時ベルリンはヨーロッパ文化の中心都市であり、約200の舞踊研究所が存在していたと述べている。この間の彼らの生活は語学の勉強と社交ダンス教師のアルバイトにほとんど費やされたが、夕方の時間を舞踊公演の鑑賞や舞踊研究所の見学に多く充てることでドイツの舞踊状況を把握することができたという。この時の社交ダンスの生徒の一人の発言⁷⁾からは、当時まだウィグマン学校に入学していなかった江口が、帰国後日本でノイエタンツを自ら普及させることにすでに強い意欲を抱いていたことが十分察せられる。そしてまたその為の教師の選定には慎重であった様子も窺われるのである。

最終的に彼らはマリー・ウィグマンの公演を観てその舞踊に深い感銘を受けたことが、ウィグマ

ン学校入学の動機となったと述べている。⁸⁾しかしその決定については、これに加えて彼らが身を置いたドイツでの舞踊の活況が非常に強く彼らを刺激したであろうことや、日本の舞踊界で今どのような舞踊家が欲せられているかなどを理解しそれに応じようとしたことなどが考えられる。

ウィグマン学校については、彼らがどのくらいの期間に、何を学んだのかを検討する必要があるだろう。

まず「期間」については入学、退学共に明確には述べられていない。入学を決意したとされるウィグマンの公演は1932年10月21日と考えてほぼ間違いない⁹⁾と思われるが、ドレスデンの学校で学ぶためにはアルバイトを止めねばならず、そのため、勉強資金作りにその後1・2ヶ月要したと述べている。また、「一九三三年の春から夏にかけて」¹⁰⁾や、「ウィグマンの研究所には約一年ほど」¹¹⁾など、この他にも江口の発言は一貫しない。しかしベルリンでの約1年間の滞在から推測して入学は渡独2年目に入って間もなくと考えるのが妥当であろう。又、退学については次のように考える。ウィグマン学校の規則によれば年間の授業期間は9月1日から6月15日までで、7・8月は夏期講習になる。また、生徒は学校以外での公的舞台での活動は禁じられている。さらに彼ら自身の発言の中に、8月1日からクロイツベルグの夏期講習受講のためにザルツブルグへ行き、8月15日にはベルリンに戻ったとある。¹²⁾これらのことから、彼らは遅くとも8月までには退校し、9月の新学年度以降にも戻った形跡はなく、従ってウィグマン学校在学は7ヶ月以内と考えるのが妥当である。

次に「内容」については、ウィグマン学校の案内書に基づいて、カリキュラムを表く1)のように示すことができる。江口自身は、「舞踊理論、モダン・テクニク、即興舞踊と舞踊構成、デュエチュア、舞踊風パントマイム、二人舞踊及び群舞構成、音楽、舞踊教授法等々」¹³⁾、より具体的な科目を挙げ、カリキュラムやクラスのレベルには触れていない。しかし、新入生は最初全員が予科クラス(Vorbereitungs Klassen)に編入されるという規則や、7ヶ月以内の短期の在学であったことなどの条件から推測すると、おそらく期間中予科クラスにおいて毎月20時間の通常授業に加え、最低1時間(1授業時間は50分)の個人授業を受け、可能性として毎週1回設けられている「ゲロイシュリトミック」、「舞踊教育学」、「舞踊演出」や、特別講習の「舞踊音楽学」、「解剖学」を受けたことが考えられる。彼にとってこれらは「舞踊研究生として第一歩から」¹⁴⁾と表現しうる新鮮な内容であり、特にウィグマンによる個人授業は「モダン・ダンスの在り方をハッキリ掴めた」¹⁵⁾と自認するほど、彼にとっては最も重要な意味を

持つ授業であったことが解かる。

滞独中唯一の江口・宮の公演は、1933年10月26日にベルリンのバッハ・ザールで行われた。舞踊愛好家及びベルリンの日本人居留区会員からなる観衆を前に彼らは10作品を演じ、これらは全て留学期間中に創作されたものであった。¹⁶⁾そしてこの中の8作品が帰国後の昭和9年3月24日の「帰朝第1回公演」で再演されている。¹⁷⁾約5ヶ月の時間とドイツ・日本という距離をおいて行われた2つの公演は、内容的には多くの共通部分を持っている。両者に対する新聞・雑誌の批評を見よう。

まずバッハ・ザール公演について特に注目すべきは、ドイツやヨーロッパの新しい舞踊との関連性に言及した点である。江口らの舞踊が多くの観客の予想に反して、日本の伝統的舞踊形式を離れ、よりドイツ、ヨーロッパ風の舞踊形式を目指している意図が明らかに読みとれたにもかかわらず、それは「ドイツのさまざまな舞踊のスタイルの過度なごちゃまぜ」¹⁸⁾であり、「ヨーロッパの舞踊の型を自分勝手に敷衍した造形的姿勢の単なる並列の域を脱し切れず」¹⁹⁾に止まっているなど、ドイツ・ノイエタンツの本質からはかなり遠い舞踊であったとする指摘が共通して多く見受けられる。²⁰⁾

一方の「帰朝第一回公演」については、「新興ドイツ舞踊の真髓を伝えるものとして、各方面から非常な期待を以て迎へられたが、その結果は予期を裏切らず、その洗練された舞踊テクニクと新鮮な感覚とで、近來にない高度の芸術的香気に満ちた舞踊会であった」²¹⁾や、「現在迄に所謂独乙派舞踊を吾々に贅した吾国舞踊家の何人にも倍して正当且つ優秀なる理解の下に独乙派舞踊を移入してくれた」²²⁾。「本場の舞台を踏み、親しく革新者達の指導を受け、多くの作品を研究して来た江口、宮両氏の創作を見るに及んで、我々は一層具体的にこれら前衛的舞踊作家達の思想と彼等の企画しつつある芸術とをわくすることが出来た」²³⁾など、江口らがドイツ・ノイエタンツやマリー・ウィグマンの正当な継承者として何らの疑問もはさまず受け入れられたことが明らかに読み取れる。換言するならば、観客は江口らの舞踊を通してドイツ・ノイエタンツを観ようとしたとも言えよう。特に、従来の日本では見られなかった新しい動きや音楽、衣裳は非常に新鮮な印象を与え、江口らを代表者と位置づける日本のノイエタンツのイメージを形成する契機になった。この背景には先述した日本の状況があることは言うまでもない。

バッハ・ザール公演は彼らの滞独2年間で締めくくり、「ウィグマン学校に身を置いてモダン・ダンスの真髓を悟り、創作の在り方や、動き方の

方針を会得した」²⁴⁾成果を現地の観客に初めて披露した、創作舞踊家として記念すべき出発点であった。そしてまた、帰朝第一回公演は、日本の舞踊史上に彼らを位置づけることになったという点において、ドイツ・ノイエタンツの本質との関わりにもまったく言及されずに受け入れられたことも含めて、特に意味をもつと考える。

Ⅲ おわりに

江口がドイツにおいて創作を開始したことや、その再演作品等の発表に対する評価によって日本の舞踊界に位置づけられたのが、帰朝第一回公演以降であったこと、又彼自身が自らの舞踊の基礎にウィグマン学校での学習があると自認していることなどを見ても、ドイツ留学が江口の新しい舞踊(ノイエタンツ)の出発点であったことは間違いない。

そして彼のノイエタンツが以後どのように展開していったかを、戦前・戦後に渡る長い活動を追って見ていくことが次の課題として浮び上がってきた。

補：本研究に用いたドイツ語文献については、近藤篤三郎教授(岡山商科大学・ドイツ文学)に訳を依頼し、その内容に関しては論者と訳者との間で十分に検討した。

表く1) ウィグマン学校のカリキュラム

課 程	内 容	授業計画	備
予 科	体操・表現研究・身体感覚の発達	毎月、教室で20時間の授業	心
養成 I II III	幾何学及び運動学・表現と型の総合	と1時間の個人授業	
上 級 (舞踊団)	技術能力の洗練・舞踊表現にニュアンスをつける自己創造的制作	毎月、教室で20時間の授業	修
ゲロイシュリトミーク	舞踊に用い得る伴奏楽器の操作と利用。作曲指導。	毎 週 1 回	選
舞踊教育学	教職の理論的・実践的準備		
舞 踊 演 出	グループ舞踊の構成と演出の指導		
舞踊音楽学	舞踊的諸要素を考慮した音楽の基本原理の入門。作曲指導。	特 別 講 習	択
解 剖 学	人体の構造と機能の基本原理の伝達		
個人授業	個人的矯正という形で		必 選

註

- 1) この点については、これまで舞踊批評家によってほぼ一致した評価がなされてきた。具体的には、学会発表資料を参照。
- 2) 江口隆哉、「私の自叙伝」(『ダンスワーク』第21号, 1977)

- 3) 石井漢は『私の舞踊生活』(大日本雄弁会講談社, 1951, p.93)の中で自分がウィグマンを紹介した最初であると述べている。
- 4) 村山知義, 『演劇的自叙伝第2部』, (東邦出版社, 1971)。林久男, 『芸術国巡礼』(岩波書店, 1925)。学会発表資料く2)ー1参照。
- 5) 学会発表資料く1)及びく2)ー2参照。
- 6) 光吉夏弥, 「批評家と今後の問題」(『都新聞』昭和8年10月10日)。学会発表資料く3)参照。
- 7) 植田敏郎, 「ベルリンの思い出」(『日本産業経済新聞』昭和57年9月3日)。
- 8) 前掲2), p.61。
- 9) 江口が最も感銘を受け、入学を決意したと述べている作品「Todesruf」は1932年10月21日の公演プログラム中第3番目に演じられた。学会発表資料く5)参照。
- 10) 『日本大学新聞』, 昭和9年5月20日。
- 11) 『東京新聞』, 昭和30年5月13日。
- 12) 江口隆哉, 「クロイツベルグ氏を語る」(『音楽世界』第6巻・第4号, 1934) p.64。
- 13) 前掲10)。
- 14) 「演劇青年から舞踊へ」(『東京新聞』, 昭和30年5月6日)。
- 15) 江口隆哉, 『舞踊創作法』(カワイ楽譜, 1961) p.56。
- 16) 学会発表資料く9)参照。
- 17) 学会発表資料く12)参照。
- 18) Marga Jahn, Der Argriff, Berlin, Nr.254, 28. OKt。
- 19) F. Z., Berliner Tageblatt, Nr.506, 27. OKt。
- 20) 学会発表資料く10)及びく13)参照。
- 21) 江口博, 『国民新聞』, 昭和9年3月30日。
- 22) 裕 一, 『舞台舞踊』, 昭和9年度春季版。
- 23) 牛山充, 『朝日新聞』, 昭和9年3月26日。
- 24) 江口隆哉, 「続・舞踊創作法」(『現代舞踊』第18巻3号) p.5

なお本研究は補筆し、「戦前の日本におけるノイエタンツの受容——江口隆哉・宮操子をめぐって——」として、就実女子大学一般教育『研究年報』(第6号, 1987)に掲載した。